



## 展覧会概要

漆で絵を描き、金粉や銀粉を蒔きつけて文様をあらわす「蒔絵」は、日本文化において長きにわたり理想美の象徴となっています。本展覧会は MOA 美術館・三井記念美術館・徳川美術館の3館が共同で開催し、平安時代から現代の漆芸家作品にいたるまで、3会場で国宝25件、重要文化財50件を含む計188件を展覧して、蒔絵の全貌に迫ります。

徳川美術館では、国宝14件、重文24件を含む約120件を展示。国宝「初音蒔絵調度」（徳川美術館蔵）をはじめ、平安時代の和様意匠の完成を示す国宝「仏功徳蒔絵経箱」（藤田美術館蔵）や重文「野辺雀蒔絵手箱」（金剛寺蔵）、国宝「籬菊螺鈿蒔絵硯箱」（鶴岡八幡宮蔵）をはじめとする鎌倉時代の蒔絵の名品、琳派様式の蒔絵、江戸時代から近代に活躍した名工による作品など、各時代を代表する名品に、現代の人間国宝を加えた選りすぐりの蒔絵をご紹介します。

さらに国宝「源氏物語絵巻」（徳川美術館蔵）をはじめとした物語絵巻や屏風、書跡なども合わせて展覧し、日本人が追求した美の系譜をたどります。

## 展覧会基本情報

- ◆展覧会名 特別展 大蒔絵展—漆と金の千年物語
- ◆会場 徳川美術館 本館展示室
- ◆会期 2023年4月15日(土)～5月28日(日) ※会期中展示替あり
- ◆開館時間 午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- ◆休館日 月曜日 ※ゴールデンウィーク期間<5月2日(火)～7日(日)>は休まず開館
- ◆観覧料 一般1,600円 高・大生800円 小・中生500円  
※20名様以上の団体は一般1,400円 高大生700円 小中生400円  
※毎週土曜日は高校生以下無料
- ◆主催 徳川美術館 MOA美術館 三井記念美術館 朝日新聞社
- ◆後援 國華社 漆工史学会 日本工芸会
- ◆協力 あいおいニッセイ同和損保 名古屋市交通局
- ◆大蒔絵展公式サイト <https://maki-e.exhibit.jp>
- ◆大蒔絵展公式 Twitter @Maki\_e\_ten

## プレス内覧会

2023年4月14日(金) 午後1時～2時30分 (12時45分受付開始)

会場：徳川美術館 本館展示室

内容：展覧会担当学芸員による概要解説の後、自由取材

## 第1章 源氏物語絵巻と王朝の美

平安時代は、宮廷を中心とした貴族文化が爛熟して和様の美をつくり上げた。なかでも平安後期は、宮廷貴族たちの優雅な生活環境を背景としながら純日本的な意匠の蒔絵調度が完成した。

王朝の室礼は蒔絵調度をはじめ、「調度手本」として美しい装飾経、冊子や巻物が制作された。小野道風、藤原佐理、藤原行成らの三蹟の時代には和様の書が完成し、その書を支えたのが料紙装飾である。和歌巻、帖、写経などの料紙には豪華な金銀の装飾が用いられたほか、文様や葦手絵には蒔絵の意匠との共通点が見出され、素材を超えた和様意匠の完成をみることができる。



【画像1】 国宝 源氏物語絵巻 柏木（一）  
平安時代 12世紀  
徳川美術館蔵  
5月20日（土）～28日（日）公開



【画像2】 国宝 源氏物語絵巻 宿木（一）  
平安時代 12世紀  
徳川美術館蔵  
4月27日（木）～5月7日（日）公開

## 第2章 神々と仏の荘厳

「神宝」は格式の高い神社に古神宝類として伝来した品で、神社の創建および造替遷座や天皇即位、特別な祈願の際に公家や武家等から奉納された。伝来する数々の神宝には宮廷の生活文化が色濃く反映されている。

平安時代の仏教は、伝教大師最澄（767～822）と弘法大師空海（774～835）によって新たな動きが始まる。最澄が開いた天台宗が根本に据えた『法華経』は作善として写経の功德を説いたため、美を尽くした装飾経が制作された。一方で空海の請来した密教図像や法具は平安時代の密教美術に大きな影響を与えた。真言宗の各寺院には袈裟、宝珠や經典を収めるための蒔絵の名品が伝来している。



【画像5】 国宝 金地螺鈿毛抜形太刀  
平安時代 12世紀  
春日大社蔵  
4月27日（木）～5月7日（日）公開



【画像3】  
国宝 仏功徳蒔絵経箱  
平安時代 10世紀  
藤田美術館蔵  
4月15日（土）～5月7日（日）公開



【画像4】  
国宝 藤菊螺鈿蒔絵硯箱  
鎌倉時代 13世紀  
鶴岡八幡宮蔵  
4月15日（土）～5月7日（日）公開

## 第3章 鎌倉の手箱

鎌倉時代には、造粉技術の向上により研出蒔絵、平蒔絵、高蒔絵の基本的な三技法が完成した。特に丸粉の完成は力強い輝きの金地（金伏懸地）も生み出した。この頃の蒔絵には、大型で内容品の付属する手箱の名品が遺る。

鎌倉蒔絵の特徴に、和歌や漢詩にちなんだ歌絵がある。図様の中に文字を隠して、モチーフのもととなった和歌や漢詩を読み解かせる趣向である。一方で有職文や幾何学的な散し文で飾られる作品もみられ、構築的で規則的な新しい意匠の傾向をみせる。

鎌倉時代の蒔絵の意匠は、王朝の様式を踏襲して冷え枯れた文芸思潮への過渡期と考えられる。



【画像6】  
重要文化財 檜扇紋散蒔絵手箱  
鎌倉時代 13～14世紀  
東京国立博物館蔵  
Image:TNM Image Archives  
4月15日（土）～5月7日（日）公開



【画像7】  
重要文化財 山水人物蒔絵手箱  
鎌倉時代 14世紀  
MOA美術館蔵  
5月9日（火）～5月28日（日）公開



## 第4章 東山文化－蒔絵と文学意匠

室町蒔絵は、『古今和歌集』『千載和歌集』などの和歌やその注釈書、説話と結びついた文学意匠に特徴がある。同時に能と結びついた意匠も数多くみられ、謡曲とも関連づけながら鑑賞したのであろう。

室町時代は、蒔絵師の家系・幸阿弥家と五十嵐家が登場したことも特色である。幸阿弥家は、初代道長が足利義政に仕えてより代々にわたり室町幕府蒔絵師職を継承した。五十嵐家は幸阿弥家とともに近世初頭に京で活躍し、その子孫は加賀蒔絵の基礎を築いた。

蒔絵技法は、研出蒔絵と高蒔絵を併用した肉合研出蒔絵、さらに金貝、切金、鋏などを多用し、複雑化の傾向をみせる。



【画像8】  
重要文化財 小倉山蒔絵硯箱  
室町時代 15世紀  
サントリー美術館蔵  
5月9日(火)～5月28日(日)公開



【画像9】  
重要文化財 菊慈童蒔絵手箱  
室町時代 15世紀  
西新井大師總持寺蔵  
4月15日(土)～5月7日(日)公開

## 第5章 桃山期の蒔絵－黄金と南蛮



【画像10】重要文化財 秋草蒔絵歌書筆筒  
桃山時代 16世紀  
高台寺蔵  
5月9日(火)～5月28日(日)公開

政治や社会システムの大幅な転換期となった桃山時代には、変化した需要者の好みを反映した蒔絵意匠や技法が工夫された。豊臣秀吉が天下統一を遂げると復興建設ラッシュがおこり、城郭、寺社などの建築空間や大量の調度品を装飾するための「高台寺蒔絵」と呼ばれる簡便な蒔絵が流行をみせた。

またこの時期、西洋から来日したキリスト教宣教師や商人たちが蒔絵に魅了され、「南蛮漆器」と呼称される祭礼具や西洋式家具などを大量に注文し、輸出した。

なお研出蒔絵や高蒔絵による伝統的な蒔絵も、大胆で明るい時代の機運をまといながら脈々と続いていた。

## 第6章 江戸蒔絵の諸相

江戸時代にはそれまで培われてきた蒔絵の技法が集約され、多様な表現が試みられた。幸阿弥家や古満家、梶川家が将軍家の、五十嵐家などが大名の御用蒔絵師として、室町時代以来の意匠や技術の伝統を継承する一方、本阿弥光悦、尾形光琳、小川破笠など個性的な活動をする作者も現れた。

さらに天下泰平を背景に人々の暮らしにもゆとりが生まれ、印籠、櫛、盃といった小品の蒔絵が都市で暮らす町人たちの生活を彩った。

また桃山時代の「南蛮漆器」で西洋貴族の人気を博した日本製漆器は、江戸時代に入るとオランダを介してヨーロッパなどに送られ、彼らの異国情趣を満足させた。



【画像11】国宝 舟橋蒔絵硯箱  
伝本阿弥光悦作  
江戸時代 17世紀  
東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives  
4月15日(土)～5月7日(日)公開



【画像12】  
国宝 初音蒔絵文台・硯箱  
幸阿弥長重作  
江戸時代 寛永16年(1639)  
徳川美術館蔵



【画像13】  
四季草花蒔絵茶箱  
原羊遊齋筆・酒井抱一下絵  
江戸時代 19世紀  
個人蔵  
5月9日(火)～5月28日(日)公開

## 第7章 近代の蒔絵－伝統様式

明治維新によって大名や公家などのパトロンが衰退し、後ろ盾を失った蒔絵師たちは、政府主導の殖産興業政策のもと、欧米向けの輸出品制作に活路を見出す者も現れた。

一方、国内では欧米に倣った博覧会や展覧会が盛んに開催されるようになり、蒔絵も公の場における展示や販売が可能となった。

また、帝室（皇室）による美術工芸作家の保護と制作奨励を目的とした帝室技芸員制度も、伝統的な工芸の保護・発展に大きな役割を果たした。

本章では輸出用の蒔絵制作に携わり、国内外の博覧会にも出品するとともに、帝室技芸員としても活躍した柴田是真、池田泰真、川之辺一朝、白山松哉らの優品を紹介する。



【画像14】蒔絵八角菓子器  
白山松哉作  
明治44年(1911)  
MOA美術館蔵

## 第8章 現代の蒔絵－人間国宝

第二次世界大戦後の日本は社会的にも経済的にも混乱した状況にあり、伝統的な工芸技術は衰亡の危機に瀕していた。

昭和25年(1950)、国は文化財保護法を制定して、工芸技術のうち芸術上、工芸史上の観点から価値の高い無形の「技」を「重要無形文化財」として指定して、伝統的な工芸技術の保存と伝承などの助成を行うこととした。

昭和30年(1955)、重要無形文化財の第一次指定および認定が行われ、いわゆる人間国宝が誕生した。同年に人間国宝が中心となって「社団法人日本工芸会」を設立し、工芸技術の保存や伝承、公開とともに日本伝統工芸展を企画した。現在の人間国宝にもその精神は受け継がれている。



左【画像15】赤とんぼ蒔絵箱  
松田権六作  
昭和44年(1969)  
京都国立近代美術館蔵



右【画像16】蒔絵螺鈿丸箱「秋奏」  
室瀬和美作  
平成29年(2017)  
ポーラ伝統文化振興財団蔵

## 広報画像ならびに視聴者・読者プレゼント提供

特別展「大蒔絵展－漆と金の千年物語」を、ぜひ御社媒体にてご紹介ください。画像を1点以上使用してご紹介いただいた場合、視聴者・読者プレゼントとして本展覧会の御招待チケット（非売品）を、1媒体5組10名様にご提供いたします。



<下記内容をメールまたは電話、ファックスにてお知らせください 利用期間：～2023年5月28日(日)まで>

希望画像番号

使用媒体

放送日・発売日

プレゼント提供 希望する ・ 希望しない

貴社名

ご担当者様

データ送付先アドレス

ご連絡先電話番号

### 【ご利用にあたっての注意事項】

- ・画像のご利用は本展覧会の紹介用途のみに限ります。
- ・部分アップのトリミングは可能ですが、色変更等の加工はご遠慮ください。
- ・二次利用不可です。
- ・画像には最低限「タイトル」と「所蔵」のクレジットを明記してください。
- ・内容確認のための校正原稿をお送りください。
- ・ご掲載誌、DVD等を1部「徳川美術館 管理部 広報宛」でお送りください。

 **徳川美術館**  
The Tokugawa Art Museum

〒461-0023 名古屋市東区徳川町1017

TEL：052-935-6262（10時～17時受付）

052-935-8222（営業時間外受付）

FAX：052-935-6261

担当：吉川 yuki@tokugawa.or.jp

竹内 d.takeuchi@tokugawa.or.jp